

期間のうちに忘却の彼方に追いやられた古代の死霊に対し、庶民層までイエが拡充する近世社会では、固有名詞をもった供養の対象としての大量の死者が継続的に生み出されることになった。

社会の世俗化に伴い、神仏や死者の世界が後景に退いた近世社会では、不特定多数の死霊との日常的な接触は忌避すべきことと考えられた。そこで近世人は死者と契約を交わし、その墓地を日常的に読経の声が聞こえる寺院の境内に建立するとともに、彼岸やお盆などの折々に縁者が墓を訪れ、死者を家に招いた。死者はその代わり、普段は墓地に安住してさまよい出ないことを約束させられた。近世は現世の内部で、死者と生者の個別の契約にもとづき、両者の世界の厳密な分節化が成し遂げられた時代だったのである。

だがそれにも関わらず、近世では冷酷な殺人と死体遺棄、供養の放棄など、生者側の一方的な契約不履行は跡を絶たなかった。そのため、恨みを含んで無秩序に現世に越境する死者も膨大な数に上った。それら個々の死者は、例外なく明確な復讐の対象をもっていた。近世の幽霊はその遺恨の解消に絶対的な救済者を介在しない点において、救いから疎外されて苦しむ中世の死霊とは異質な存在だった。近世において、人間社会を反映する仮借なき怨念に満ちた大量の幽霊譚と怪談が生み出される背景は、ここにあったのである。

無遮と無主

——無縁供養の動態性——

池上良正

これまで発表者は「死者供養」を、東アジアで形成され民衆層に普及した、ユニークで動態的なひとつの「救済システム」として捉える視点を提示してきた。この視点に立てば、「死者供養」は仏教的な輪廻転生や追善回向の教説を中核としながらも、中国社会の儒教的な教説（とりわけ孝思想）や儀礼・祭祀様式、さらには在来の民衆習俗や道教的な理念などを吸収することによって醸成されたひとつの「救済システム」とみることができる。具体的には、「生者が一定の宗教的な功德を積み、その徳を死者たちに振り向けようとする行為は、（A）親孝行や先祖の孝養にもなれば、（B）何らかの未練や怨念を残した死者（苦しむ死者）たちの救済にもなる」という二面性が巧みに融合したのである。本発表では、とくに（B）を代表する「無縁供養」に注目してみたい。

「無縁」をめぐる仏教の教義的原義には二つの側面がある。

①「無遮」の側面と②「無主」の側面である。①は特定の対象がなく平等なことで、「無縁慈悲」などとして理念化され、無遮大会・無遮水陸齋などの儀礼に体现されてきた。②は仏縁のないこと、転じて、申う縁者がないことを意味し、「無主（無祀）孤魂」などの用例に代表される。今日の日本では、「無縁ボトケ」「無縁社会」など②の側面のみに光が当てられる現状があるが、宗教学・宗教史の観点から現代の「無縁」観の一面

性を問い直す作業も必要になる。

宋代以降に完成した「死者供養」システムには、(A)(B)の動態性とともに、(B)を支える①②の二面的動態もまた組み込まれていた。儒が次第に体制内宗教としての地位を確立し、祖先祭祀を独占するなかで、仏教徒たちは、身内の親族に限定されない仏教的な「孝」を模索する。そこでは「無遮」の理念や、「無主」の諸霊への配慮が強調されることになる。改革開放政策のなかで復興がめざましい現代の中国寺院でも、水陸会、盂蘭盆、焰口(施餓鬼)儀礼などに代表されるように、一切の衆生に無遮の供養をする功德をもって、現世の安穩と身近な死者の後生善処(極楽往生)を祈念することが強調される。ここでは①②が有機的に連動した無縁供養が、(A)(B)の共存に結びつけられている。

日本でも元興寺極楽坊聖徳太子立像胎内納入物をはじめ、中世後期の各地の札や塔碑に残された「法界平等」の追善、近世に頻出する「無縁法界」「三界萬霊」などの無縁供養では、①②の動態性が保持されていた。さらに中国から移入され、一五世紀から一六世紀に禅宗を中心に発達をとげた追善儀礼としての「施餓鬼(施食)」においては、『諸回向清規』の回向文などにみられるように、この動態性を保持した無縁供養が仏教の民衆化に大きな役割を果たしたことがわかる。

近世日本の寺檀制度は、体制内宗教となった仏教諸宗派の「死者供養」を、(A)の側面に限定する傾向を強めていく。さらに近代以降の仏教界は、一段と(A)に特化し、寺院による「供養」といえば、もっぱら檀家の「先祖供養」のみが強調さ

れるようになった。それは(B)の中心にあった無縁供養において、「①無遮」を切り捨て「②無主」を強調する動きとも連動していた。現代の盂蘭盆に付随する施餓鬼・施食でも、たてまえとしては「三界萬霊への供養の功德を先祖に回向する」といったかたちで、(A)(B)の共存が認められるが、現実には「各家のご先祖の供養」のみが強調されることによって、一般檀信徒に対して(B)の側面が積極的に説かれることは少ない。

しかし、歴史的展開をみれば、むしろ「①無遮」と「②無主」が有機的に連動することで(B)を支えてきた広義の「無縁供養」こそ、救済システムとしての「死者供養」が広く民衆層に定着するさいの原動力になっていた、という点にあらためて注目したい。

変貌する韓国の死者供養に対する

人々の意識と葛藤

井上治代

韓国の高度経済成長は一九六〇年から始まった。それに伴って葬礼に関しても変化が起こったが、激変したのは九八年ごろからである。その変化の主導者は一般市民ではなく、行政とその政策を後押しするマスコミ、さらには市民団体といつとも日本のそれとは違い行政の政策意図で活動する人々である。そもそも韓国といえば儒教文化に根ざした土葬が主たる葬法で、後継者を残さないで亡くなる未婚死や、自宅以外の場所で亡くなる客死を忌み嫌う死生観をもっていた。しかし大都市圏の火